

第1章

はじめに

認知文法（Cognitive Grammar）は、1960年代当時20代にして言語学の概説書を大手出版社から上梓されるような将来を嘱望されていた若手生成文法研究者でありながら、次第に生成文法理論に疑問を持つようになった Ronald Wayne Langacker が、新たな文法理論を構築すべく思索を重ねたのちに Langacker (1987, 1991) をひとまずの集大成として提示した文法理論である。第I部はその認知文法¹の概要を紹介することを目的とするが、認知文法はその用語法も含めて理論としての独自性が高く、一般性や統合性を目指そうとするその指向性もあって、時にその議論は抽象性が高く、なされる主張も背景を理解していないとその必然性や意義がわかりづらいところがある。以下前半となる第2～9章において認知文法の一般的な特徴や基本概念、文法観などについて述べる際には、かなり根本的な点からそれらを取り上げ、認知文法の成立背景やほかの文法理論との対照などを交えていくことになる。

まず第2章で言語学における認知文法のおおまかな位置づけについて述べた後、第3章においていくつかの重要概念を導入することを通して認知文法の一般的な特徴を概観し、さらに第4章で認知文法をある意味で特徴づけるとも言える、表現形式で意味を表す象徴機能に文法の本質を見る文法観について詳述する。続く第5章で意味を担う「形式」とは何かという根本的な点での

¹ Langacker自身によっては詳しく扱われていない音韻面については、Langacker (2007: 5節 “Phonology”) で言及されている文献を参照。なお、第I部の引用の日本語訳はすべて筆者（坪井）によるものである。用語の訳語については、辻 (2013) に載っているものについてはその訳語を参考にした。

Goldberg の構文文法 (Langacker (2005) に従って以下 CxG と略記) や Croft の急進的構文文法 (Radical Construction Grammar: 以下 RCG と略記)との違いを確認した後、そうした違いの根底にある文法観・意味観の具体的な表れとして、名詞／動詞という品詞の扱いを第6章で、文法関係の「主語」の扱いを第7章で、それぞれ見る。主語概念と密接な関係を持つ節の構造の認知文法の扱いを第8章で紹介した後、第9章において CxG と RCG に対して認知文法の立場からの批判的検討を行う。

後半の最初となる第10章ではまず認知文法の近年の新たな展開について述べ、第11章で認知文法の具体的な分析をいくつか見た後、最終第12章において近年の認知文法の特徴がもっとも良く見て取れるものとして、談話の扱いを取り上げて紹介する。

第2章

機能主義言語学、認知言語学、 認知文法と「認知」の意義

広義の
機能
主義

認知
文法の
特色

contrast
between
functionalism
&
cognitive ling.

criticism against C.L. この認知言語学の認知重視については、認知言語学と親和性の高い研究を行っている研究者からも批判がなされることがある。例えば Croft は、機能主義的類型論の立場から多くの点で認知言語学に通じる研究を行っているが、認?

¹ 認知文法では一般的に、動的な過程としての対象認知・概念化を指して “conceptualization” (「概念(化)」), その結果生じたものは “concept” (「概念」) と言うが, その両方の側面を意識して “conception” という言葉もよく用いられる。第 I 部の引用の日本語訳では、意図する意味が文脈から推測できる限り、そうした用語の使い分けにそのまま対応した訳しほけ特にしない。

知言語学は認知という脳内現象に囚われずに言語の社会的側面の重要性を認識して「脳内を出る」べきであると言う (Croft (2009a: 395)).)

しかし、神経活動としての認知が脳内現象であるとしても、それはほかのすべてから切り離された、言わば真空状態の中で1人孤独に存在する認知主体の脳内に自然発生するものではない。² つまり、認知言語学で言う「認知」とは、主体を取り巻く物理的・社会的・文化的環境との相互交渉の謂に他ならない。とりわけ認知文法において言語の使用が話し手・聞き手の相互交渉に基づく協調行為であることが重視されることについては、第12章において談話の扱いについて述べる際に特に明らかになるだろう。

さらに、認知言語学が認知科学の一分野としての言語学の中でも特に「認知」言語学と言われるのは、その成立の過程においてアンチテーゼとして存在した、Chomskyを中心とする生成文法研究者たちの立場との対比による。認知言語学は、1989年の国際認知言語学会の設立とその翌年の学会機関誌 *Cognitive Linguistics* の創刊をもって理論としての基盤を確立したと言って良いだろうが、当時の理論言語学の主流であった Chomsky らによる生成文法研究においては、自然言語は意味に言及することなく規定可能なものとされていた。<sup>Chomsky
"Syntactic Structure"</sup> 言語に対するそのような見方は、「人間が生得的な言語知識として持って生まれる普遍文法が非常に限定された記号列しか生成しない（対象として扱えない）ものであり、耳にする周囲の大人の発話から幼児が仮設しうる文法の幅がはじめから非常に狭く限定されていて、仮設しては棄却する無駄な手間が大幅に省かれることにより、^{123→} 短期間のうちに言語を獲得できる」と考えられたため、どのような記号列を生成できるかを規定するものとしての文法の形式的特徴に関心を持つ、その意味での「形式 (formal)」言語理論としての側面が明確だったからであった。その後、Chomsky 的生成文法³ からはその意味での形式言語理論の側面は薄れたが、人間の認知能力は互いに独立に機能するモジュール的機構によって実現されているとする Fodor (1983) などの影響も受けて言語を一般化。根拠は？

² Langacker (2008a: 500) 参照。

³ 「生成文法 (generative grammar)」というと Chomsky を中心とする研究者たちが提唱する特定の生成文法を指すことが多いが、實際にはそれに限られない。同じ生成文法の一種である主要部駆動句構造文法 (Head-Driven Phrase Structure Grammar (HPSG)) においては形式言語理論としての性格がより明確である。なお、意味と形式の対を文法記述の基本としている点では HPSG も構文文法の一種であり、生成文法的であること構文文法的であることは矛盾しない。形式言語理論としての Chomsky 流生成文法の変質については、Haspelmath (2019) 参照。

認知能力とは異質の独立のモジュールとみなし、さらに言語内でも統語論は意味論とは別個独立のモジュールであるとして、いわゆる自律統語論 (autonomous syntax) を提唱し、言語において意味に本質的な役割を認めない立場が採られた。統語機能だけ持って来ても動く: モジュール性

そのような思潮が理論言語学において一般的であるなか、認知言語学は、言語をほかの認知能力とは異質なものによるとは考えず、部分的な特定領域への特化をもその一部として含む⁴ 一般認知の一種として位置づけ、環境世界や種固有の 認知機構のあり方によって人間に固有の非均整さを伴う認知行為の一種として見えた
 言語を捉える立場を打ち出した。言語の意味とは、環境内存在である人間が生存し続ける上でこの世界を様々に分節して意味づけ、認知していくことの言語的表れであるが、認知言語学、後述するようにとりわけ認知文法においては、言語はそのような人間の認知一般のなかに位置づけられるべきものであり、環境世界に対する意味づけ作用が本質的な重要性を持つと考えるがゆえに「認知」言語学と呼ばれる。

(しかし、言語が人間の一般認知に基盤を持つことを主張するとしても、その言わば認知主義の妥当性の神経活動レベルでの裏づけについては、ほかの言語理論の様々な主張同様、関連隣接領域の研究から得られる知見に依ることになるし、一般的なレベルで認知主義を唱えるとしても、それを具体的な形で言語分析において実践することも実際には容易ではない) 認知文法の独自性は、言語分析を旨とする言語学の範囲に留まりながらも、関連隣接分野による検証可能な提案となることを視野に入れ、言語現象を一般的な認知活動の中に位置づけるべく、独立に存在を認められる一般性の高い認知機構にのみ基づいた最小の 枠組みで言語現象を扱おうとする、その認知主義への忠実さにある。理論依存的仮構物を必要とせず、独立に妥当性が示されている一般性の高い枠組みに のみ依ることによって可能になる枠組みの自然さと必要最小限性 (austerity), (第3章7節でふれる、規則群と規則のスロットに入る語彙という図式で従来別扱いしてきたものに対する) 統一的な扱いをその一例とする、多様な現象を統一的に捉えることを可能にする統合性 (unification), は認知文法の注目すべき特徴となっている。

だから意味論寄りになるのか。

⁴ Karmiloff-Smith (1992) が論じたように、部分的にモジュール的に機能するようになるのも人間の認知一般の特性の一部であり、モジュール的性質が観察されても、そこからただちに生得的に組み込まれて可塑性のないモジュールの存在が結論されることにはならない。

前提が違うのはいい・悪いではない。「人間の認知一般にこう言うことが言えるから、言語にもそれが当てはまる」と言うことが言えたらいいよね。

第3章

認知文法の一般的な特徴

1. 機能主義的な文法研究の3層と認知文法

認知文法のそのような特徴は、認知文法が目指すところと関係がある。すでに述べたように、認知文法は広義の機能主義言語学に属するが、Langacker (2008a: 8-9) は機能主義的な言語研究を3つの層から成るものと考えている。

まず基層となる第1層は、適切な記述と、そのための理論的道具立て・記述装置の構築、つまり、適切な記述を行うのに必要になる分析手法や文法概念の設定である。これは個別言語の具体的な文法構造を詳細に記述・分析することを通してはじめて可能になるが、その際には自然言語の多様性や多面性に対応できるだけの包括性・柔軟性に留意する必要がある。そのようにして規定された自然言語の言わば可能な「外延」に含まれる各種の構造は、すべて同等の具体例で構成された全体、といった感じ。ものとして自然言語において同じように扱われ用いられるわけではないので、こうした基層的分析に基づく第2層においてなされるべきは各種の普遍性や傾向性の抽出であり、そのようにして明らかにされた自然言語の特徴に機能的説明を与えるのが第3層ということになる。この言語研究の3つの層は互いに独立しているものではなく、上位の層は下位の層を前提とし、下位の層は上位の層を常に念頭に置くものだが、認知文法が主に目指すのは、この第1層に当たる、自然言語のすべての形式や意味に見られる構造を明示的に特徴づけて規定する枠組みの構築である。

この、ある意味ずいぶん控え目な課題設定は、言語を一般認知の中に適切に位置づけた記述を行うために真に必要なものが何なのか 分析対象となる言語というものがどのようなものであり、それを適切な形で捉えるのに必要なものは何なのかを明らかにすることがそもそも現時点では十分ではないという認識

あり得る言語の形はたくさんある。しかし、よくある言語の形はある程度限定されてくる。手の挙げ方はあらゆるスタイルが考えられるが、大体地域差がない。

現段階では不十分であるという認識

による。そのような認識の下、既存の理論や道具立てを前提として文法現象をそれに合わせて記述するのではなく、普遍性の探求やその機能的説明を視野に置きながらも、言語の実態に即した分析を通してその記述に必要な概念装置・道具立てを明らかにしようとする。(後でいくつか概要を紹介する具体的な構文の分析を見ればわかるように,) 文法の本質を表現形式で意味を表す象徴機能^{semiological function}を見る認知文法の実際の文法分析においては詳細な意味分析が行われるのが常だが、それはそれこそが分析対象の性質を明確にし、その分析に必要なものが何であるのかを明らかにすると考えるからでもある。アブリオリにある道具立て・方法論で個別言語を分析して行くのではなく、実際の分析を通して道具立てを検討する。

こうした態度は Croft (2001: 62) の「統語理論における根本的な問題を論じ、そして解決することは、詳細な意味理論がなくても可能である」という考え方とは対照的である。Croft の採る RCG は、後述するように認知文法とは目指すところが同じではないため、両者の間に様々な違いがあるが、意味の詳細な分析をとりあえず棚上げにしておけるものと考えるかどうかは、文法における意味の役割をどう考えるかという重要な論点に関わることである。これについて RCG と認知文法の比較を行う際に述べることにする。

意味の詳細な分析なくして形式を成立させることができ→意味と形式は独立している。チョムスキーの Syntax Structure にあるのと同じ。意味の詳細な分析がないと形式が成立しない→意味と形式が相互依存している。

2. 内容要件

すでに述べたように、認知文法の際だった特徴の1つとして、文法分析に用いる概念装置・記述の道具立てを独立に存在が認められる必要最小限のものに限ろうとすることがある。そのような方針の下に行われる認知文法の文法分析において重要な役割を果たすものとして、「内容要件 (content requirement)」という、認知文法が自らに課す次の制約がある。

他の体系に content requirement ある？？
 「強い仮説として設定されるこの要件は、言語体系に属するものとしては、(i) 言語表現の一部として現実に用いられる意味構造 (semantic structure), 音韻構造 (phonological structure), 象徴構造 (symbolic structure) と、(ii) それらから共通性を抽出したスキーマ、および (iii) それら同士のカテゴリー化関係、のみが認められることを言う。内容要件の主眼は、話し手の持つ言語に関わる知識を現実に用いられ表される形式や意味の要素、あるいはそうした要素から 3.1 節に挙げる連合 (association), 自動化 (automatization), スキーマ化 [スキーマ抽出] (schematization), カテゴリー化 (categorization) といった基本的な認知現象を通して派生するものだけに限定することにある。こうした確実

次頁にて

なものを基盤とすることによって、この制約は認知文法が自然かつ必要なものだけに絞りこまれた理論であることを保証してくれる。」

(Langacker (2008a: 24-25))

前頁に於いて列挙されていた

ここで基本的な認知現象として言及されている項目について Langacker (2008a: 16-18) は、以下のような説明をしている。

ソシュール用語？？

- ・連合：結びついたものとして処理されるようになること一般を指す。

言語表現における意味構造と音韻構造の結びつきがわかりやすい例にな定着している記号と意味の連合のこと。コロケーションも連合の一種(i.e.電話に→でる)

る。つまり、/denwani/: ❶も 電話に:出る もまとめてるのがアツい。

- ・自動化：靴紐を結ぶ、九九を唱えるなど、繰り返しによって複合的なものが完全に習得され、部分部分の処理を意識することなく実行できる

ようになること。認知文法では、言語表現の自動化を指して、構造が次第に定着度¹を増していく「単位 (unit)」になる、という言い方をする。単位化したものとしていないものを区別する場合、前者は角括弧 (「[]」)、後者は丸括弧 (「()」) で示すのが認知文法の表記法である。

- ・スキーマ化 [抽出]：複数の認知経験に内在する共通性を取り出して抽象度の高い概念を得ること。スキーマ化は語彙の獲得に重要な役割を果たす。語彙は個々の使用の場での細かな発音や指す事柄の違いを捨象するスキーマ化によって得られる。

- ・カテゴリー化：カテゴリーは、何らかの点で同じと見なされるものの集合であり、カテゴリー化は、ある対象 A を既存のカテゴリー X に属するものとして受け取ることを言う。[カテゴリー化関係にある A と X との間に特徴指定の食い違いがなく、後者がより詳しい特徴指定を受けている前者のスキーマに当たる場合、認知文法では「X → A」のように実線矢印で両者の関係を表す。] ある程度の食い違いがあっても、連合関係にあったり、あるいは何らかの類似性が感じられる場合には、A は X の一種としてカテゴリー化される場合もある。その場合には「X → A」のように破線の矢印で両者の拡張関係を表す。(かつては「円形闘技場」を意味した ring が、その機能・目的の類似性のために四角いボクシングの「リング」にも拡張適用されたようになった場合などがそうした事例となる。)

ここでいう高さは、相対的
高さのこと。

¹ 定着については、4節参照。

具体例

認知文法では文法記述に必要なものとしてはこうしたものだけを認め、現実の言語使用から引き出すことのできない、理論依存的に仮構される抽象的なものを文法記述に用いることをしない。

このことの1つの表れとして、音声形式と意味内容の対である象徴構造は意味構造と音韻構造が直接象徴関係を結ぶことで構成されるものとされ、生成文法などにおいて設定されるような、音韻構造や意味構造から独立したものとして両者をつなぐ統語構造のような理論依存的なインターフェース的表示レベルに当たるものは認知文法にはない。冷静に考えてそんなものが独立してある訳ないやろ。でもちゃんとチョムスキーアイデアの論文読みたい。

ここで注意しておくべきは、意味と象徴関係にあるのは音声（または文字やジェスチャーなどの具体的な表現媒体）だということである。主として象徴記号²の一種として機能する言語が音声によって意味を表すものであることは近代言語学の鼻祖と言えるであろう Saussure 以来の常識であるはずだが、認知文法と同じように意味と形式の対としての「構文」を言語の基本単位と考える Goldberg の CxG や Croft の RCGにおいて、意味と対になって構文を形成するものは音声形式ではなく統語範疇や文法機能なのであり、この点も広義の構文法理論の中での認知文法の独自性の1つとなっている。この点でひとり認知文法だけが Saussure³ に忠実であるわけだが、そうしたものがほかの文法理論において必要になり、認知文法においては不要になる理由については後述する。認知文法・CxG・RCGってそもそも全部独立した違う物だったのか。

3. 使用基盤性

内容要件という厳しい制約を自らに課すことと深く関係することとして、認知文法が使用基盤モデル (usage-based model) を採っていることがある。

理由

「認知文法は言語の構造に対する使用基盤モデルの一種である [...]」
その全ての側面に於いてこのモデルでなければならぬ、という主張だといふことを意識せよ。
う言う理由の1つは、使用事象がすべての言語的な単位の源であると
いう主張にある。言語の単位とそれを生み出す使用事象の関係は内容要

association?

² 「記号 (sign)」は、記号とそれが表すものとの結びつき方によって通常3種類に分類される。写真とそれが表す被写体のように類似性によって結びつくものを類像記号 (icon), 煙とそれがその存在を指し示す火の場合のように何らかの近接性によるものを指標記号 (index), そして慣習的取り決めによるものを象徴記号 (symbol) と呼ぶが) 認知文法の「象徴 (する)」は、この意味での象徴記号による場合に限らず、表現形式によって意味を表すこと一般を指して言うので、この点注意されたい。

³ Descartes などと認知文法の関係については、野村 (2014) 参照。

件によって厳しく制約される [...]。内容要件によれば、言語の単位はスキーマ化とカテゴリー化という2つの基本的な認知過程を経て使用事象から生じる構造だけに限られる。」 (Langacker (2008a: 220))

すでにふれたように、認知文法では、相互交渉機能を言語の本質的な機能の1つと考えるが、(使いなじんでその操作が認知処理上単一ルーチンとして定着・慣習化した、上の「自動化」で言及されている、認知文法が「単位 (unit)」と呼ぶ構造を生み出す言語主体同士の相互交渉は、当然のことながら現実の言語使用の場において生じる。そのような特定時の個別の言語使用を認知文法では使用事象 (usage event) と呼ぶ。

「新たな表現を作り出し理解するのは言語体系自体ではなくて、利用可能な膨大で多彩な資源をそうした目的のために駆使する言語の使用者である。[そのようにして用いられる資源には、言語的な単位のほかに、記憶、計画、問題解決能力、一般的な知識、短期的及び長期的目标が含まれ、さらに物理的・社会的・文化的・言語的コンテキストに関する理解の総体も含まれる。]こうした要因のすべてが関与して生じる現実の言語の使用を私は使用事象と呼ぶ。つまり、抽象化されないままの実際の音声とその特定の使用の状況で言語の使用者が持つ理解の総体を表す概念が対になって結びついているものである。したがって、使用事象とは言語の使用者が了解する限りの詳細さで音声面と概念面の特徴づけを受けた発話であることになる。」 (Langacker (2000: 9))

「言語を構成する語彙や構文などの慣習化された単位が言語主体が相互交渉する使用事象から生まれるのであれば、そこに関与するのは言語主体が直接認識理解できる音声と意味と、その2つが象徴関係で結びついている象徴構造 (用いられる言語表現), および、(それらを対象として行われるスキーマ化やカテゴリー化といった,) その存在が独立に認められている基本的な認知操作によって得られる構造だけ、となるのである。

4. 言語の「構造」の特殊性：使用事象からの共通性の抽出と定着

しかし、ここで考えておかなければならない大きな問題がある。建物のような構造体が特定の構成要素の固定した形での組み合わせという、恒常性のある静的な実体として存在するのに対して、言語のあり方はそれとは大きく異なる

る。音韻的なものであれ意味的なものであれ、言語の「構造」は時間軸に沿って展開するニューロン群の一定パターンでの発火によって実現されるだけのものであり、同じ「構造」という言葉が用いられても、具象物の構造体の場合とはそれが指すものは大きく異なる。

しかも、そのように全体としての恒常性や構成要素の固定性を欠く形で実現されるもの、つまり個々の言語表現の意味や音声、も、上の Langacker (2000) からの引用部分にあるように、特定時の言語使用に特徴的な個別性を多く含んでいて、個々の使用事象を通しての同一性は厳密には存在しない。つまり、話し手が伝え、聞き手が了解する実際の発話の文脈での意味 (contextual meaning) は、用いられる言語表現が明示的に意味する慣習化された意味に限られず、多種多様な百科事典的知識や発話の流れも含めてその発話の場から得られる様々な情報、およびそれらを用いてなされる推論などを含むものであり、さらに、こうした文脈的意味を喚起する表現形式のほうも、用いられるごとに様々な点でわずかずつ異なって発音される。使用事象というものがこのように全体としての恒常性や構成要素の固定性を欠く形で実現されるうえに文脈依存の個別性を多く含むものであるのならば、そこからどのようにして一定の慣習的な言語単位が抽出され、一定の安定した構造が成立するのかは実は自明なことではないことがわかるだろう。

この、使用事象ごとの細部の異なりがもたらす問題は、使用基盤モデルにとってだけ存在するものではない。ある表現形式 x が A の具現事例として機能することが A という規則によって x が生成・認可されるものとして扱われるモデルにおいては、規則というものの性質上、規則とその具現事例の間に矛盾・食い違いがないことが通常要求されるので、例えば会話において particularly が部分的な縮約を受けて発声される [ptfklri] という音声を /pərtɪkјelərli/ を具現するものとして生成・認可することはできない。有声音が無声音の間で無声化するような、音韻環境に依存する変異形の場合であれば、基本形を特定の音韻条件の下で特定の文脈的変異形に変えるような規則群を設定することもできるだろうが、そのような形で扱える変異形はごく一部にすぎない。writer/rider の [t/d] が弾音化して同じように発音された場合の聴き分けは、その談話の流れの中でそれが言及される確率の見積もり・推論によるだろうし、そもそも、緊張する、気がせく、疲労している、などの身体条件で異なるようになに発声されることもいくらでもあり、どの変異形がどの場合に何の変異形なのかは、あらかじめ指定された条件との一致を要求する規則によって規定することは不可能である。一般的に言って、慣習化した規範からのある種の逸脱・ず

문제 ↓ れがありながらそれを補正して意図されたように適切に認識することは、あらかじめ規定された規則の執行という形で扱うことはできない。

こうした問題を解決する上で重要なものの1つが、「定着 (entrenchment)」という、言語に限らず人間の認知に一般的な現象である。“*Saussure*의 *signifié*와 *signifiant*은 “*언제나 일정한지어요*”는 이거?”

「そもそも言語単位が生じるのは使用事象において用いられるからである。より正確に言えば、繰り返される共通性が強化されることによって使用事象から抽出される。(例として、(a₁)、(a₂)、(a₃) を異なる使用事象のそれぞれに見られる類似点を表すものとしよう。それは表現形式に関わるものでも意味的なものでも、あるいはその両方を表すものでも構わないし、複雑性のあるものでもないものでも良い。話を具体的にするために、それらは言語を習得中の者の耳に聴こえたある音節の発音だとしよう。そのそれぞれの発音は音声の微細な点を見れば互いにわずかずつ異なっている。(下付き数字で示し分けた) その違いは聞き分けられることもあれば気づかれないこともあるだろうが、重要なのは (a) という大まかな共通点である。こうした使用事象が何度も続いていく間、(a) が繰り返し生じ、繰り返されることで強化される一方で、微細な違いは繰り返されず、強化されない。その結果、そうしたことが十分繰り返されれば、(a) は単位として定着し、[a] と表記されるものとなる。一方、微細な違いは [a] からは消えてしまうので、[a] はそれが生じる元であった実際に聴き取られた音に対しては特徴指定が抽象的なスキマの関係にある。認知文法では、単位はその種類やサイズを問わず、すべてこのようにして成立するものとされ、それは談話レベルについても変わらない。認知文法が使用基盤的だというのはこうした考え方することによる。」

(Langacker (2008a: 458))

このように見てくれれば、現実の使用事象というものが具象物の構造体のような恒常性を欠く、時間の経過で消失するニューロンの発火現象であり、使用事象ごとに異なる個別性を含むものであっても、繰り返しの使用を通して共通する部分が強化されて定着し、逆に特定の使用事象にしか表れずに繰り返されない部分は定着せずに弱化して捨象されていくことで「構造」と呼びうる安定した内容を持つものが使用事象から抽出され、使いなじんだ言語資源として単位化していくという、人間の認知に一般的な現象の表れとして自然な形で了解することができるであろう。

5. カテゴリー化としての言語使用

単位を新たな使用事象での発話の产出や解釈に用いるためには、その単位の適用は適格なものでなければならない。単位は、個々の使用事象間で異なる部分が強化されずに弱化して削ぎ落とされて成立したものであるため、その特徴指定は個々の使用事象において用いられる場合よりも抽象的なものであり、その意味で単位はスキーマの一種である。スキーマの適用のわかりやすいあり方に、スキーマの特徴指定と食い違った点がなく、より細かく指定された特徴を持つものにスキーマを適用する場合がある。そのようにして抽象的な特徴指定がより具体的なものとなることを認知文法では「精緻化 (elaboration)」と呼び、スキーマを精緻化することで得られるものをそのスキーマの「具現事例 (instance または instantiation)」と言う。^{動詞/状態関数の項みたいな?}スキーマと具現事例の関係は、文を生成する規則と、その規則のスロットに語を挿入して生成される具体的な文の関係と同じものだが、⁽²⁾^{認知文法では慣習化された単位を新たな使用事象において用いることをそのような規則の適用としてではなく、人間の認知一般に見られる}カタゴリー化の一種として捉えるので、カタゴリー化に一般的に見られるように、起りこりうるのは精緻化に限らず、部分的な特徴指定の食い違い・逸脱を伴う拡張もありうることになる。^{この点はすでに「内容要件」の節のカタゴリー化の説明でふれられていたことである。}→ 気づかんかった。

A → X のやつ

6. カテゴリー化の基準となる構造の選択

言語の使用を条件指定との一致に基づく規則の適用のような機械的なものではなく、カタゴリー化として捉える上で考えるべき基本的な問題がある。^(カ)カタゴリー化の基準となるべき構造の選択がどのようにして適切な形で行われるか、である。

「まずこのことは認知一般の問題であって言語にだけ特有の問題であるわけではないことを指摘しておくべきだろう。見慣れた顔の認識を例に取ると、私が持っている顔についての知識の中には Suzanne Kemmer と Sydney Lamb の顔を表すスキーマがある。Suzanne が部屋に入って来たとき私は普通正しく彼女を Suzanne と認識して Syd と混同することはない。そのように正しく認識するためには、私はその視覚経験をカタゴリー化する際に Lamb の顔に対するスキーマではなく Kemmer の

顔に対するスキーマを活性化しなければならない。[...])

[...] コネクショニスト的処理モデル₇一般において考えられている

[...] 説明はおおむね次のようになる。ある特定のカテゴリー化の対象は様々な確立した単位を活性化する傾向があり、そのいずれもが原則的単位=カテゴリー⁸を想起する、的な？にはそれをカテゴリー化することが可能である。このような単位の集合をその対象の活性化集合と呼ぼう。最初は、 [...] 活性化集合の成員は対象 T によってすべて一定程度活性化される。 [...] しかしながら、実際に T をカテゴリー化するのはある 1 つの単位だけなので、それらは互いに競合 (compete) することになる。あるものはおそらく相互に抑制的で、互いに抑制し合うことになる。最終的には活性化集合のあるものがほかのものよりも活性化の度合いが高くなり、その競合に勝つ。 [...] T をカテゴリー化するのは、ここで活性化した構造と呼ぶ、この単位なのである。

ある経験があって、それがどのカテゴリーに属するか頭の中で検索していく (compete) という定性的理解が正しいだろうか。

活性化集合のどの成員が競合に勝って対象をカテゴリー化するのに用いられる活性化した構造となるのかを決める要因はいくつかある。^① 第 1 点目は定着度、つまり内在的な活性化のされやすさである。例えば、中立的な文脈では、Bali を belly と聞き間違えるほうがその逆よりも起こりやすい。^② 先行刺激 (プライマー) が、その後続刺激 (ターゲット) の処理に対して影響を与える現象 2 点目は文脈によるプライミング効果で、通常の活性化のされやすさを逆転しうる。例えば、これから行こうとしているバリ島のことを話している最中に、(旅行のあれこれについて考えていて) 唐突に私が、belly dancers を見たい、と言ったとしよう。この文脈ではあなたは私が Bali dancers を見たいと言ったと勘違いしても不思議ではないだろう。^③ 3 番目の要因は、対象とその対象をカテゴリー化しうる構造との間の共通点の多さである。特徴の共有があるからこそそもそも対象が活性化集合の成員を刺激して呼び起こすことができ、共有されている特徴が多いほど強く刺激されると考えて良いだろう。ここから帰結する重要な点は、抽象度の低いスキーマ、つまり特徴の指定がより細かい構造、は、抽象度の高いスキーマよりも本来的に競合に強いということである。ほかの条件が同じであれば、抽象度の低いスキーマは、より詳細な特徴を持っているために、対象と共有されうる特徴が多くなるのである。」 (Langacker 2000: 14-16)

「ある対象をカテゴリー化するのに活性化される単位がその対象との食い違いがまったくないものである必要はない。 [...] カテgorie化は部

分的には（トップダウン的に）予測に基づいて行われるものであって、（ボトムアップ的に）対象の特徴によるだけのものではない。実際、対象自体がカテゴリー化によるところが多いこともしばしばある。対象がまずざっと（場合によってはかなり大雑把に）処理された段階である単位が喚起されると、その単位は自らの構造を対象に投影して構造化し、対象に内在する構造を強化したり補完したり無視して上書きしたりもする。こうした補完の例としては、（ちょうど夜空に星座を見る時のように）複数の点を見慣れた形として見てとる場合が挙げられるだろうし、対象を無視したカテゴリー化は、校正ミスによくある、書かれているものを書かれるべきものとして見てしまう誤りがその例となる。」

(Langacker (2008a: 230))

すでにふれた [t/d] が弾音化した writer/rider の聴き分けのような事例は、この引用で言われているカテゴリー化のトップダウン的性質によると理解できるであろう。

上の引用部分では文脈がカテゴリー化に影響する事例が挙げられているが、文脈がカテゴリー化に影響するのは、先行文脈で言及されている、発話の場にある、あるいはそのように当該文脈に存在するものと何らかの点で重なりあるいは連合がある、といった場合には、活性化現象に一般的な拡散活性化 (spreading activation) が起きてカテゴリー化の基準として選ばれやすくなるからである。文脈が定着と同じ働きをすることになるのはこのためである。⁴

7. 文法と語彙の連続性 誰でもわかる。

以上述べたように、言語は現実の言語使用に根ざすものであり、究極的には神経活動のパターンに還元される、固定した実体性を欠くものであるうえ、使用事象ごとに異なる文脈依存的個別性をも含むものだが、繰り返される部分が強化されて定着することで一定の安定性を持つ使用パターンとしての構造が生じる。⁴ そのようにして生じた構造が互いに組み合わされて用いられることが繰り返されると、その複合的な使用パターンに関する認知処理が自動化し、その複合的な使用パターン自体が認知処理上单一の単位となる。そのような繰り返しによる強化・定着を通していわば “pre-package” された言語資源となり

⁴ Langacker (2008a: 228-229) 参照。

うるのは、単音から文レベルの構文スキーマまで、また構成要素がすべて指定されているものから抽象度の高いスキーマまで、その複合度 (complexity)・サイズや特定性 (specificity) において多種多様なものであり、それらが使用事象ごとにわずかずつその定着度や慣習性を変えながら存在することになる。

このような見方は、文法を「語彙部門と統語部門」、あるいは「語と、語に入るスロットから成る規則」とに二分する従来の図式を否定するものであり、従来別個のものとされていた両者は複合度、特定性、定着度・慣習性によって規定される連続体の中に統合される。

 めちゃ おもうい!!

8-甲

8-乙

Chomsky

Cognitive

8. 「静的な言語知識の体系」に対する「動的な言語資源の使用」

常に定着・
捨象を繰り
返してい

る。言語は
動的なもの
なのだが。
確かにそう
だよな、言
め、認知文法では
話者の持つ文法知識を指して「相互に関係づけられた構造を
語変化って
持つ慣習化された言語単位の一覧 (“a structured inventory of conventional
連續的なも
のだから常
linguistic units”)」と言ふ。こうした場合に通常用いられる集合論の用語の
に起こって “set” (‘集合’) ではなく、「在庫表、手持ちの品の一覧」を表す “inventory”
ないとおか
しよな、あ
る時期だけ
急に言語変
化して、あ
る時期では
ピタッと止
まるなんて
幻想だよね
確かに。

ただ、ある
言語を記述
する

〔前節で見たように、成立した多様な単位は音韻面や意味面の共有部分を通して互いに重なり合う関係にあるだけでなく、カテゴリー化の関係で結ばれたり、共に高次の構造を構成する合成 (composition) 関係を成して存在するた
だよな、言
め、認知文法では
話者の持つ文法知識を指して「相互に関係づけられた構造を
語変化って
持つ慣習化された言語単位の一覧 (“a structured inventory of conventional
連續的なも
のだから常
linguistic units”)」と言ふ。こうした場合に通常用いられる集合論の用語の
に起こって “set” (‘集合’) ではなく、「在庫表、手持ちの品の一覧」を表す “inventory”
ないとおか
しよな、あ
る時期だけ
急に言語変
化して、あ
る時期では
ピタッと止
まるなんて
幻想だよね
確かに。〕
Chomsky 的生成文法などとの立場の違いが表れている。

なお、1つ注意すべきは、単位化した表現も、使用事象ごとに異なる文脈情報を取り込みながら繰り返される共通部分が強化されて定着を繰り返し、逆に繰り返し使用されない部分は弱化して定着度が下がるので、言語単位の一覧と言っても、それは常にわずかずつ変化し続ける、定常状態を本質的に欠くものであり、実際にはこれと指せるような固定したものではない。その意味からは、言語は言語主体が所有している静的な知識の体系としてよりは、その時点での手持ちの言語単位をほかの利用可能な認知資源と合わせ用いてコミュニケーションを行う、動的な認知活動として捉えるほうが適切な面が多く、その意味で言語はその使用の相の下に捉えられるべきものである。⁵

 この、言語の使用と、それを可能にする知識の関係について、従来の理論言

⁵ 認知文法が言語を文法規則や言語知識としてよりも動的な認知活動として捉えることについては、Langacker (2008a: 8.1.1 節 “What is Language?”) に詳しい論述がある。

語学において大きな影響力を持ってきた見解として、Chomsky (1965) の「言語能力 (competence)」と「言語運用 (performance)」あるいは Chomsky (1986) の、脳内に表象されているものとしての言語 ('内在言語 (I-language) (internalized language))」と、実際の言語使用に関与してくるそれ以外の要因によって「夾雜物」が混じって現れる現実の言語 ('外在言語 (E-language) (externalized language))」、とを峻別されるべきものとし、前者のみを言語学の正当な研究対象とする言語観が挙げられるだろう。豊多しい

【 】そうした言語の知識と言語の使用の峻別は、実際には一定の年月をかけて段階的に進んでいく幼児の言語習得の漸進性を考慮せずに言語は一瞬の間に獲得されるとする、いわゆる「瞬時獲得モデル」同様、言語の本質を現実に観察される言語とは異なる普遍文法に求める理論の中核を守る防御帶の働きをする補助仮説群の一部として採られていたものと思われる。(1980年頃は、理論の予測と観察事実の食い違いを理論の中核を守るために補助仮説群で処理すべきことを言う Lakatos 流の科学方法論に依ることが多く、→即理論崩壊ではない。大切なことは、 その方法論の正当性を主張し、言語学が科学の王たる理論物理学に学ぶべきことを説く Koster (1978: 8-9) には、当時のそうした雰囲気が色濃く反映している。)

【 】そのような考え方方が理論言語学界において隆盛を極めていた頃、認知文法はすでに見た内容要件に良く表れているように、独立にその存在が認められる認知機構と現実に直接認識理解可能な音声や意味以外の、現実から乖離した理論依存的仮構物の想定を許容しない理論構成を探った。それにより、前節において見たように、言語の使用とそのための資源としての慣習的な言語単位とは、前者によって後者がわずかずつ変化し、そのように変化した後者が前者のあり方をまた規定していくという、現実に観察される相互依存の関係のままに了解され、それが強化、定着、カテゴリー化という、言語に限らない一般的な認知過程によってどのように成立するかが示されることになる。言語の実態から離れることができなく、用いる道具立てに言語だけに適用される想定や理論依存の仮構物も必要としないという点は、そうしたもの前提とする枠組みに対する認知文法の魅力であり、その優越性を示すものとなっている。

ソーシャルもその
ようなこと言って
いる。ソーシャル
は、考察が生成・
認知どっちも混
乱している。

=====
チョムスキーは
誤った、という
こと。

象徴体系としての文法

意味の重要性。

Semanticsに入るよ!

意味
重要な
理由
1意味
重要な
理由
2

前節まででは、言語の二大機能の1つの相互交渉機能関わって、使用事象という実際の発話の場での言語主体間の相互交渉から言語の構造が生じることを見てきた。〔言語主体が相互交渉できるのは、相手に自分が意味することを伝えるのを可能にする概念表出機能を言語が果たすからであるが、すでに見るように、認知言語学が理論としての体制を確立してくる1990年頃までは、意味機能に言及することなく規定される言語の形式的体系性およびその基盤にあると仮定される普遍文法こそが言語研究のあるべき対象とされてきた。〕これに對して認知文法は、「象徴体系としての文法」という文法観 (symbolic view of grammar) を前面に押し出して、意味が本質的な役割を持たないものとして言語を捉える見方とは対立する立場を探ってきた。意味 形式 こう思ひもしないか…

表現形式とそれが表す意味内容は互いに相手を喚起しうる点では対称的ではあるが、そもそも意味とその表現形式とを比べてみれば、意味を表すべく表現形式があるのであってその逆ではなく、意味こそがより根本的なものである。また、通言語的な表現形式・構造の点での多様性を越えて存在するのは担われる意味機能の同一性である点からしても、意味機能はそれを実現する形式の前提となる重要性を持つのであり、認知文法の理論構成や用いる道具立て・分析手法はこの点を踏まえたものとなる。〔文法の特質が明らかになるような記述を行うためには、文法を構成する一部である概念構造を(一貫した原則に従って)妥当と思える明示性をもつて特徴づけねばならない」(Langacker (2008a: 27)) や、「意味から認知文法の記述は始まる」(Langacker (2017b: 263)) という言葉はこうした立場を端的に表明したものであり、「認知文法の観点からは、意味の記述なしで文法構造を記述しようとするのは辞書で意味を記述しな

いことと同じ」(Langacker (2017b: 270)) くらいにあり得ないこととなる。

こうした認知文法の考え方は、意味から文法的な振る舞いが予測できることを言う、言わば自律統語論の鏡像のような自律意味論を提唱するものとして批判されることがあるが、認知文法の立場からは、そうした批判は単なる誤解にとどまらない概念的混乱の表れである。¹ 意味からの予測可能性を問題にする際に念頭にある「文法的振る舞い」とは、例え同じ意味の動詞なのにそれが取る補文内の表現されていない項名詞句のコントロールの仕方・可能な解釈の幅が言語によって異なることや、関係節化できるのは主語だけか、目的語も可能か、といった可能な関係節化のパターンが言語によって異なることなどであろう。しかし、それらは認知文法であれば構文スキーマの意味極、つまり（認知文法が音韻極と呼ぶ）音声形式と対になるものであり、それ自体「意味」に他ならない。同じ意味の動詞が言語によって異なるコントロールの仕方をすることは意味からの文法的振る舞いの独立性を示す、と言う時にその「同じ意味」という言葉で指しているのは、コントロールの仕方についての指定を除いた「意味」のことであり、/コントロールの仕方についての指定も除かずに含めたものが「意味が同じ」と言われる個々の言語の動詞の実際の意味なのだから、「文法的な振る舞いは意味から予測可能」と言うのも、「文法的な振る舞いは意味からは予測不可能」と言うのも、いずれも「文法的振る舞い」という概念の内容を理解していないがための意味を成さないものの言い方である。意味は文法の外にあってそれと対になるものではなく、文法を構成するものなのである。

なお、「構造」という言葉も、一般的には意味から切り離されたものとしての表現形式を指して用いられることが多いが、認知文法ではそれは音韻構造にも意味構造にも、また両者が結びついて構成されている象徴構造についても用い、単に「構造」という言葉で象徴構造を指すことも多い。特に表現形式のほうだけを指す場合には、「音韻構造」あるいは「音韻極 (phonological pole)」、または「象徴する構造 (symbolizing structure)」といった、その点を明示する言い方がされる。

1. 認知文法の意味観

意味を言語にとって本質的な重要性を持つものとする認知文法の意味観はど

¹ Langacker (2017b: 267) 参照。

のようなものであろうか？それは、言語主体同士の使用事象における相互交渉という使用基盤的な動的な認知処理の絶えざる繰り返しとして言語を捉える見方と密接に関係する。より具体的には、「意味」で指されるものにどのようなものが含まれるのか、「意味」とはどのような性質のものと捉えるべきなのか、といった基本的な点についての捉え方が、言語を言語主体間の動的な相互交渉として捉える言語観から導かれることになる。

1.1. 「辞書的意味」と「百科事典的意味」の峻別の否定

認知言語学以前の伝統的な意味論においてしばしば前提されていたことの1つに、意味は「辞書的意味」と「百科事典的意味」の2つに分かれ、言語学的意味論で扱われるべきは前者のみ、~~いつわことがあつた~~。こうした二分法が採られた理由として、意味というものの捉えづらさがある。音声学や音韻論であれば音、形態論や統語論であれば語形や文というような、分析対象の分かりやすさが意味論の場合にはない。音形や語形・文型が誰にでも同じように耳に聞こえ目に見えるのとは異なって、持っている膨大で多様・雑多な知識のうちのどれだけが用いられた表現によって頭の中に喚起されたのかは、目に見えないだけでなく、人によって、さらには同じ人でも場合によって、その内容は一定しない。こうした意味の不確定性を忌避すれば、対象を扱いやすい特定の概念領域、(例えば「調理」,)に限定した上でその内部を意味し分ける語同士の意味対立のあり方を分析する方向に向かうか、あるいは語の意味と、その語が指す事物についての知識とを別物とした上で、明確に限定・規定可能と思える部分だけを語の意味とするか、いずれかになる。前者は意味場 (semantic field) の理論として一定の記述的妥当性のある成果をもたらした²が、後者の方針を探ると、例えば Leech (1981) が dog について [+ANIMAL], [+CANINE] だけが言語的意味で、それ以外の [+HAVE-FOUR-LEGS], [+HAVE-TAIL], [+HAVE-FUR] などの無数の特徴は犬が持っている特徴であって dog という言語表現の意味ではない、「犬」の意味は「イヌ科の動物」である、とするよう、無内容なことになりかねない。俺はこういうの好きだけだなあ。Leech読んでみよう

しかし、認知文法が採る使用基盤モデルによれば、様々な百科事典的知識や発話の場において得られる情報などを利用して文脈依存的に意味され了解される文脈的意味が繰り返し使用されることによる強化・定着によって言語単位の慣習的な意味が成立するのであるから、そこには当然百科事典的な雑多な情報

² Lehrer (1974) など。

も区別なく含まれるし、そのようにして慣習的な意味が成立する過程は漸進的なものなので、この時から文脈から独立した語固有の言語的意味となったと言えるような時点もない。

二極間の
グラデーション
である。

したがって、語自体の「辞書的意味」と語が指す事物についての情報である「百科事典的意味」という区別は存在せず、あるのは特定の使用事象の文脈に依存して得られる文脈的意味と十分な定着度と慣習性を得て確立した意味を両極とする連続体である。その一方の極にはそれを意味論に属す言語的意味と呼ぶべき定着度と慣習性の高さがあり、それを欠く他方の極は語用論で扱われる言語外的意味とされるべき文脈依存的で非慣習的な性質のものではあるが、両者の間には固定した明瞭な境界は存在しない。このため、前者を後者と峻別されるものとして、それのみを言語学的意味論が扱うべき対象とする伝統的な「辞書的意味観」は否定され、「百科事典的意味観」³が採られることになる。

△ ピンポイント(点推定みたい, 非現実的, 理想化空間) △ 幅がある(線推定, 現実的)

2. 意味の2つの側面：「概念内容」と「捉え方」

認知文法では、「語の意味とは、ある事物について我々が持つ無限とも言える様々な知識に対して特定の仕方でアクセスすることによって喚起されるもの」(Langacker (2008a: 38-39))とされるが、それは「概念内容 (conceptual content)」と、それに対する特定の「捉え方 (construal)」の両面から捉える必要がある。以下ではまず概念内容について見ていく。

2.1. 認知領域群と文脈依存的活性化

表現が喚起する概念内容には様々な「認知領域 ((cognitive) domain)」が関与する。認知領域には空間や時間のような(概念や経験の内容というよりはむしろ何事かが経験され概念が生じる一種の抽象的な「場」に当たる)(それ以上別のものに還元できないという意味)基本的 (basic) なものもあるが、言語表現が喚起する大抵の認知領域はより基本的な認知領域に基づいて規定される非基本的なものである。

また、ある表現が喚起する認知領域群 (matrix of (cognitive) domains) は、百科事典的意味観が言うように多層的・多面的で多様であるだけでなく、知識項目は間に明瞭な継ぎ目なく多様な仕方で互いに繋がっているため、喚起される認知領域群はある程度以上の複雑性を持つだけでなく、個々の表現によって

³ Haiman (1980) 参照。

どの範囲がどの程度に喚起されるのかは必ずしも固定していらず、部分的に文脈に依存して変わる。飲み物を飲むための「グラス」の意味での glass を例として見てみると、それによって喚起される認知領域には以下のようなものが含まれると考えられる。

1. 空間 [基本認知領域] これだけ基本的
2. 形状 : [円筒のような形をしていて、片方が閉じている] (形状概念は空間概念を前提とする)
3. 典型的なあり方 : [垂直方向に長く、閉じた側が底になる] (空間概念、垂直概念、形状概念、などを前提とする)
4. 機能 1 : [液体を入れる容器] (典型的なあり方、液体概念、容器概念などを前提とするが、容器概念は内包概念、位置が変わる可能性や時間が経っても姿形の変わらない恒常性などを前提とする)
5. 機能 2 : [飲むための一連の動作中の位置づけ] (機能 1 に加えて、人体や手で掴むことや腕の動き、消化、などを前提とする)
6. 材質 : [通常ガラス]
7. 大きさ [片手で楽に持てる]
8. その他 [代価、洗浄、保管、うっかり落として割る可能性、配膳時の位置、揃いのセット、製造法、など]

(Langacker (2008a: 47))

(ある表現が用いられた時に喚起されうる認知領域は常にすべて同じように活性化されるわけではない。)ある表現が指すものを規定する上で中心的な役割を果たすためにその表現が用いられる時にはほとんど必ず活性化されるものもあるれば、特定の場合においてのみ関連性を持つものとして活性化される周辺的な役割しか持たないものもある。こうした活性化のされやすさを指して中心性 (centrality) という言葉を用いる。中心性の違いが語の意味の重要な部分になることもある。(例えば、dagger と knife は、刃物を規定する認知領域群を共通して喚起するが、「人を刺すもの」という認知領域のそれぞれの認知領域群の中での中心性は dagger においてのほうがはるかに高く、このため dagger は knife よりも殺傷武器としての意味がより前景化された意味の語になっている (Langacker (2008a: 49)).)

ある語の規定に関与する概念領域の中心性がある任意の時点で特定の値を持って存在しているとしても、(中心性とはアクセスして活性化するしやすさのことであり、すでに見たように活性化が何らかの形で相互に結びつくもの同士

La centralidad cambia siempre.

の間ではより容易に拡散するものである以上、個々の実際の使用の文脈で結びつくものによって中心性のあり方は常に変化する。次の(1)が上に挙げた glass の 1~7 に対するアクセスの仕方の点で中立的な場合だとすると、(2) は fragile と共に起ることによって 6 の「材質」をより前景化するだろうし、(3) では 8 の中の「揃いのセット」かどうかという点が前面に出る。(4) は wine という語が前に付くことでグラスとしては非典型的な形状をしているワイングラスを指すために 2 の「形状」は背景化され、さらに plastic によって 6 の「材質」が明示的に否定される。

- (1) He took another sip from his glass.
- (2) This antique glass is quite fragile.
- (3) The glasses on that table don't match.
- (4) Plastic wine glasses are hard to wash.

以上のこととは、言語学が扱うべく限定されたものとしての辞書的意味と百科事典的な一般知識が峻別不可能なだけではなく、関与する概念領域群として本節で論じてきた一般知識と文脈的意味との区別も明瞭にはできないことを示している。意味とはまさに Langacker が言うように、「ある事物について我々が持つ無限とも言える様々な知識に対して特定の仕方でアクセスすること」によって特定の姿をとって立ち現れるものなのであり、Langacker (2008a: 50) が「厳密に言えば、語が完全に同じ意味で 2 度用いられることはないと言っても良いかもしれない」と言うように、現れるたびにその姿はわずかずつ異なる。これも使用基盤モデルが指示することである

2.2. 捉え方の重要性

前節では意味の基盤となる概念内容のあり方を、それを構成する認知領域とその活性化という観点から見たが、個々の言語表現は特定の認知領域群によって規定される概念内容をそれが指すものとして喚起するだけでなく、それに対する捉え方も指定する。そもそも、なんらの捉えられ方もしない、いわば生の事物などというものは人間の認識世界には存在しない。

意味が完全に同じ表現が複数慣習化して共存し続けることは自然言語においては普通起きないので、同一の対象を指す表現は通常表す捉え方が異なり、意味も異なる。「東京には上り坂と下り坂のどちらが多いか?」という漫才ネタがかつてあったが、「上り坂／下り坂」の意味の違いは同じ対象に対する視点の取り方・観点 (perspective)¹ の違いによるし、child/boy は対象を捉える特

定性 (specificity)・抽象度²の違いが意味の違いになっている。

ただし、見方が変われば見えるものが変わることがあるように、概念内容と捉え方とは完全に別個独立なわけではない。child/boy の違いは対象を捉える際の抽象度の違いではあるが、それに伴う性別指定の分だけ後者の概念内容は増しているし、概念内容を規定するものとして論じた概念領域群の個々の概念領域の中心性の変化は、どの特徴に重きを置いて見るのかという捉え方の変化でもある。

捉え方には様々なものがあるが、Langacker (2008a: 3章) では特定性³と視点の取り方に焦点化 (focusing)³と際だち (prominence/salience)⁴を加えた4つを主なものとして挙げている。⁴

焦点化の例としては、言語化のために認知対象を特定の範囲に限定すること、認知文法の用語法で言えば「スコープ (scope)」の取り方、がある。言語

例題> 焦点化の具体例!!!
化にあたっては、言語化の対象となりうるものの中から特定のものが選ばれるわけだが、その特定のものに関連して喚起されうる認知領域群のすべてが個々の使用事象において活性化されるわけではない。認知文法では、言語表現が特定の使用事象において一定程度以上活性化する範囲を「最大スコープ (maximal scope)」と言い、最大スコープの中でもその表現の意味の上でより直接的な関連性を持つ部分を「直接スコープ (immediate scope)」と呼ぶ。

そのような範囲づけがなされて焦点化された部分のうち、当該の表現が直接の意味対象として言語主体に注目させる部分を「プロファイル (profile)」と呼ぶ。認知文法の図では通常プロファイルは太線で描かれる。(「斜辺」という表現を例にとれば、直角三角形の3辺のうちの直角部分に向き合う辺が「斜辺」のプロファイルである。プロファイルは、表現が直接指示示す、通常「意味」と言っているものに当たり、プロファイルとしての取り立ては際だちを与えることの一例になるが、斜辺はそれだけを取り出せばただの直線でしかないことからわかるとおり、斜辺が斜辺であるのはあくまで直角三角形の中での位置づけに依存している。)(同様に、「火曜日」のプロファイルは火曜日だが、火曜日が月曜日でも金曜日でもなく火曜日であるのは、各曜日をほかの曜日との関連で規定する曜日順に並んだ七曜日があるからこそであり、「火曜日」という表現が言語使用者に注目させるのは火曜日であるとしても、「火曜日」という表現は七曜日をもその背景基盤として喚起している。)このように、プロファイル

⁴ この4分類は必ずしも必然的で網羅的なものとして意図されているわけではない。詳しくは、Langacker (2015a) 参照。



をプロファイルたらしめている、背景的な意味基盤となる部分を認知文法ではプロファイルと対比して「ベース (base)」と呼ぶ。⁵

2.3. 意味の多層性と不確定性：概念基層の重要性

意味をこのような複層的なものとして捉える認知文法が意味の表示に用いる図 (diagram)⁶は、表現の直接の意味対象であるプロファイルだけでなく、その背景的な意味基盤であるベースをも表現する点で、後述する語彙概念意味論の語彙概念構造 (lexical conceptual structure) 表示や CxG の意味表示とは対照的である。同じベースの中でプロファイルされる部分が変わることは通時的な意味変化だけでなく、She parked her car in a jiffy. (彼女は自動車をすぐに駐めた) と You can park here for twenty minutes. (ここに 20 分間駐車しておいていいよ) のような、同じ動詞でも一連の事象で指す部分が違うという共時的な多義においても見られる。

上に述べられた様な通時的/共時的な多様性

さらには、そうした意味の不確定性・柔軟性は、それと気づかないほどに意味現象の隅々にまで浸透している。(そのことを示す例として「プロファイルと活性化領域の乖離 (profile/active-zone discrepancy)」として知られる現象について見てみる。⁷ すでに見たように、あるものの規定に関与する認知領域は多様であり、どんなものも多面的な存在だが、個々の具体的な場合においては直接的な関連性を持つものは限られてくる。trumpet は楽器のトランペットをプロファイルするが、We all heard the trumpet. というように hear が表す関係⁸の対象となる場合には、トランペットというものの理解を構成している様々な認知領域の知識あるいはそれによって規定されるトランペットの様々な

⁵ 「認知領域群」も「概念内容」も「ベース」も、いずれもある言語表現に結びついて喚起される知識の全体を指しうるが、「認知領域群」は、あるものを規定するのに関与している概念がどのような領域に関わるものなのか、その種類・性質の別や多様性が問題になる場合に用いるのに対して、「概念内容」はそれが特定の仕方で捉えられる対象であるという点が意識される場合、つまり「捉え方」と対になる場合に主に用いる。「ベース」は「プロファイル」と対になる概念で、言語表現の直接的な指示対象であるプロファイルがどのようなより大きな認知領域の中に位置づけられるものなのかを言う時に用いられる。

⁶ 認知文法で用いる図は、当座の議論に関連する部分を必要なだけ明示的かつわかりやすく示すための便宜的なものであって、その表示対象範囲や表示様式の選択には何ら特定の理論的な意味はない。認知文法における図の位置づけについては、Langacker (2008a: 1.2.3 節 “Those Diagrams”) 参照。

⁷ より詳しくは、Langacker (2008a: 10.2.5 節 “Active Zones”) 参照。

⁸ 「関係 (relationship)」は、日常語の「関係」が複数のものについて使われるのとは違って、認知文法では一項述語が表すものも指して用いられる。

側面のうちで「樂音を発する」という部分が活性化され、演奏されるトランペットから出る音がその関係においてはトランペットの「活性化領域 (active zone)」となる。(同様に、Gerald という語のプロファイルは Gerald という人物だが、Don't ever believe Gerald. というように believe という動詞が表す関係の対象である場合には「Gerald が言うこと」が活性化領域となる。)(peel an orange で剥くのは皮だが、eat an orange で食べるのが皮ではないのも同じ現象である。)(to fill up, wash, clean, and service a car ((ガソリンタンクを) 満タンにして (車体を) 洗車し、(車内を) 掃除して (エンジン周りの) 点検をする) のような例はより複雑で、a car という表現 1 つから 4 つの異なる活性化領域の解釈を得ている。しかも、それでいながら、そう言わないと気づかないほどそうした解釈はごく普通のものである。)

こうしたプロファイルと活性化領域の乖離は、車体の一部でしかない車輪を本来指す「車・クルマ」で自動車全体を指すような、伝統的にメトニミー（換喻 (metonymy)）という名称で論じられてきたものとよく似ている。違うのは、伝統的にメトニミーとして挙げられてきたもの多くは、「(歩きではなく) 車で行く」、「車を路肩に停める」、「車を買う」のように、そうしたズレの解釈が慣習化した固定した意味になっていて、特定の関係性に依存しないものになっている点である。その意味でそれはプロファイルと活性化領域の乖離という共時的な現象であるよりも通時的に起きた変化の結果であり、プロファイル自体の変化と言うべきものだろう。認知文法でもメトニミーは「通常あるものをプロファイルする表現がそれとなんらかの領域において結びついている別のものをプロファイルすること」(Langacker (2008a: 69)) とするのが一般的である。しかし、通時態と共時態は連続するものであり、ズレが慣習化し固定化していくのも徐々に進行するものであることを考えれば、プロファイルと活性化領域の乖離を広義のメトニミーの一種として考え、メトニミーという一般的な名称で意味のズレという自然言語に特徴的な意味の不確定性を広く指すことも可能だろう。文法をメトニミー的と言っている次の Langacker の言葉はそのような趣旨のものである。

「文法は基本的にはメトニミー的なものであり、ある情報を明示的に言語化しても、それ自体は話し手・聞き手がその表現で了解するものを特定しない。表現自体が指し示す概念は単に何らかの関係でそれと結びつける要素に対する心的アクセスを可能にするだけで、実際何と結びつくのかはほかの考慮要因によって決まる。例えて言えば、明示的な言語

化は目的地の近くに連れて行くだけで、目的地まではほかの手段で訪ね
当てて行かねばならないのである。」 (Langacker (2004a: 2))

ここで Langacker が最後で言っている、言語表現自体によっては不確定なままに残されている意味を確定するのに用いられるほかの手段として重要な役割を果たすものの1つに百科事典的な一般知識がある。すでに見た、プロファイルとは異なる活性化領域を適切に解釈することは、プロファイルされているものについての様々な知識があってはじめて可能になっている。しかし、意味の不確定性を支えるのはそれには限られない。それに関与するものを認知文法では総称して「概念基層 (conceptual substrate)」と呼ぶ。

意味-一般的の文脈では百科事典的意味(↔意味論的意味)

「表現の意味は膨大で多面的な概念基層の支えを前提とするものであり、それによって形作られ、筋の通った意味をなすものとなる。そのような概念基層となるものには、(i) 先行談話によって喚起されたり新たに作られた概念、(ii) 社会的相互交渉としての対話にたずさわっていること自体、(iii) 物理的・社会的・文化的コンテクストについての理解、さらには(iv) その場の対話に関連してきうるあらゆる知識、などが含まれる。」 (Langacker (2008a: 42))

概念基層の重要性、特にここで(i)と(ii)として挙げられている点の重要性については、認知文法の談話の扱いを紹介する際により詳しく述べる。

第5章

構文における「形式」

ここまで、意味についての認知文法の立場を概観してきたが、ここからはより焦点を絞って象徴構造を形成するものとしての意味と表現形式の関係について見ていく。文法の基本単位を意味と形式の対としての「構文」とする立場を探るものはすべて広義の「構文文法」と呼びうるが、「意味と形式の対としての構文」という一見自明に思えるこの基本概念も、個々の理論においてそれが指すものは実は一様ではない。

「[認知文法, RCG, CxG という] 3種類の構文文法は、語彙も文法も形式と意味の対に還元されると考える点では同じである。Croft (2001: 62) は「認知文法の「象徴的」という言葉を使って」構文は象徴的であるとさえ言っている。しかしながら、その共通点のために見過ごされている根本的な不一致 (non-agreement) がある。「不一致」と言って「見解の相違 (disagreement)」と言わなかったのは、Goldberg も Croft もその点を自覚していないようだからで、そのため見解が相違することは言えないのである。その不一致とは、形式という言葉で何を指すかに関わる。」
(Langacker (2005: 104))

すでに先触れ的にふれたことであるが、Croft の RCG や Goldberg の CxGにおいて意味と対になるものとされているのは音韻構造のような具体的な言語形式ではなく、前者においては名詞句や動詞といった文法範疇から成る構造、後者においては主語や目的語のような文法関係から成る構造である。(英語の授与動詞の二重目的語構文を例に取れば、RCG や CxG において授与者が受益者に授与物を与えることを表す意味構造が結びつけられるのは具体的な授与動

詞の音形ではなく、前者においては「 $NP_1 < \text{verb} < NP_2 < NP_3$ 」のような（相互の語順が指定された）文法範疇から成る構造、後者においては「V SUBJ OBJ OBJ₂」のような文法関係から成る構造である。）

1 認知文法においても名詞や動詞、主語という言葉を用いるが、後述するように、それらは認知文法においては意味的に規定され、意味構造から導かれる、派生的な概念である。**2** CxGにおいて意味と対になるとされている文法関係は、述語が必須要素として取る項名詞句の形態統語面での文法機能に基づいて規定されることが一般的であり、主語については、「主語特性」と呼ばれる文法機能上卓立した特別な役割が議論してきた。¹ 主語特性には形態面に関わるものがあるが、それは英語の現在時制文において三人称単数である場合に動詞に-sという標識を取らせるものを主語と呼ぶように、ある種の形態標示において競合しうるほかの項名詞句を抑えて特別な役割を果たす特権性を指しているのであり、形態に関わりはするが、具体的な形式自体を指すものではない。

3 RCGにおいて意味と対になるとされている文法範疇も、特定の語を規定する音韻・形態・意味の上での一連の特徴群を指すものであり、文法関係同様、文法的な性質や機能によって構成される概念であって、音声のような、言葉の本来の意味での「形式」ではない。

「構文」の形式面として想定するものの認知文法との違いは、文法の基本的な性格の捉え方についての重要な違いを反映するものだが、Langacker が上に引用した部分で言っているように、**その違いの重要性はあまり認識されていない**ようである。上に引用した RCG の「 $NP_1 < \text{verb} < NP_2 < NP_3$ 」という英語の授与動詞の二重目的語構文の表示であれば、（語順は認知文法では音韻構造における音の連鎖順で、名詞／動詞の文法範疇は意味構造で、それぞれ捉えられるものであり、）（おそらくは「<」で表すことを意図されている）音的実体のない順序概念だけの語順、意味から切り離された文法範疇というような、**直接認識理解できる内容に基づかない、内容要件に従わない抽象物**を認知文法では用いないのだが、それにもかかわらず Croft (2001: 6) は RCG は認知文法の内容要件を自らの記述に課していると言う。→ 誤りだが、どんづ理論でも意味はある

RCG や CxG において文法的な性質や機能を直接指定したものが意味と対文法範疇の概念自体は認知文法もある。但し、それは意味の方にある。それを形式の方に押し付けてしまったRCGは認知文法とは相容れない。

¹ 主語特性についての最初の本格的な論考である Keenan (1976) においては意味的および語用的な特徴も主語認定の規準として提案されたが、表層的な現れであることによる確認しやすさ・扱いやすさがあるためか、以後の主語認定をめぐる議論においては形態的・統語的特徴のみが通常取り上げられるようになっている。

になる「形式」として設定されるのは、名詞や動詞、主語という文法概念を意味的に規定するのには不可能と考えるためである。そのような考え方には RCG や CxG に限ったことではなく、自律統語論を唱える生成文法は言うに及ばず、認知言語学の諸理論の中でもそれを可能と明示的に言うのは認知文法だけ、と言っても過言でないほどに、認知文法の独自性を示す点の 1 つになっている。以下では、それが認知文法においてどのように可能なのかを見ていく。

見ていい！